「県庁周辺エリア」の「ありたい姿」

整理番号 43

◀江戸時代、64艘の笹舟を繋いで架けられていた神通川・船橋は、日本一の常設の船橋として全国に知られていた。

〝水の都〟の歴史を活かす

「まちづくり」とは、「自分の住むまちをしっかり見つめ、そこを魅力ある場所に作り変えること」、と言われる。「県庁周辺エリア」の未来の姿がどうあるべきか、を考える時、富山の「まち」がどのように誕生したのか、その歴史を調べ、その特色を見つけ出すことが大切である。

松川の歴史を調べていくと、かつて〝水の都〟として賑わっていた富山の姿が浮かび上がってくる。戦国時代、越中最大の河川・神通川を外堀に富山城が築かれ、富山は城下町として発展してきた。そして、江戸時代になると、64艘の笹舟をつないだ舟橋（日本三大舟橋の一つ）がかけられた神通川は、３００隻もの帆船や笹舟が行き交う最大の通商路として賑わっていた。

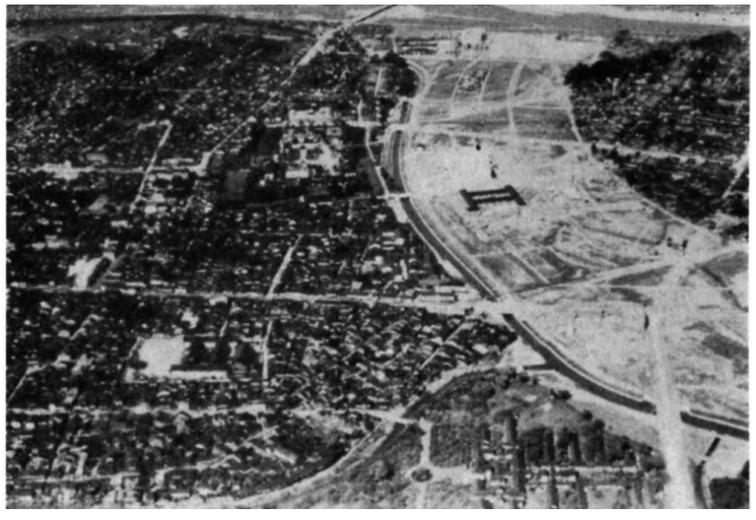
しかし、一方では大洪水を何度も引き起こしていたことから、明治の中頃には神通川の蛇行部分を直線でつなぐ「馳越線工事」が行われたのだ。その結果、神通川は現在のように真っすぐに流れるようになり、後世に往時の神通川の川筋を伝えるために残されたのが現在の松川である。

さらに1970年代、経済界から神通川の名残を残す松川に「コンクリートでフタをして駐車場にしては」との計画が発表された時、「富山のセーヌ川にフタをするとはなんたることか！」と当時の市長はじめ良識ある市民の反対の声が上がり、救われた経緯がある。

神通川の上に誕生した富山

神通川が蛇行して流れていた時の川幅は、一番狭い所で230メートル、右岸の松川から左岸の間には、現在の芝園小・中学校、富山中部高校、県教育文化会館をはじめ、サンシップとやま、県庁前噴水公園や市役所、電気ビル、NHK富山放送局、ホテルグランテラス富山、中央郵便局、地鉄ビル、タワー111、市総合体育館、富岩運河、富山赤十字病院あたりに至る広大なもので、その中心に県庁と市役所があるという、全国でも珍しい川の上に誕生した〝水の都〟と言える。

神通川から生まれた富山のまち。全国でも珍しい歴史資源を持ちながら、市民はおろか市の職員でさえ、富山のまちが神通川から生まれたことを知らないという事実。先日、なぜ富山市の庁舎に帆船のデザインが採用されているのか、市の職員と議論になったが、誰一人、かつての神通川の上に庁舎が建っていることを知らなかった。



◀右側の白っぽい部分が、馳越線工事によってできた神通川廃川地（昭和10年・写真／富山市郷土博物館）

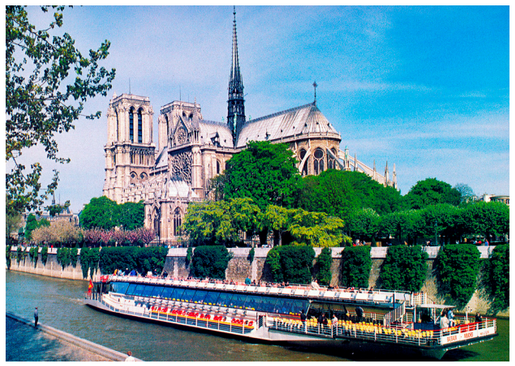
これは県庁の職員のほとんどが、県庁舎がかつての神通川の上に建っていることを知らないのと同じである。

現在、かつての神通川の川幅を知ることができるのは、松川べりの舟橋と県教育文化会館前にある常夜灯によってのみである。もっと、当時の神通川の川幅が、市民はもちろん外来者にもわかるように、標識か案内板を立てるべきである。

▶神通川によって生まれた〝水の都〟を象徴する、県庁前公園の噴水

県庁周辺エリアを中心に広大な神通川の上に、富山のまちが築かれたことを、目で知るだけではなく体でも感じることができれば、自分のまちを誇りに思い、幸福を感じることができるだろう。なぜなら、河口を埋め立てた上に築かれ、世界遺産となったあの〝ベネチア〟と、富山のまちが同じ誕生の歴史を持っていることを知ることができるからだ。

富山の戦災復興のモデルはパリ



◀富山・松川（上）とパリ・セーヌ川（下）

◀セーヌ川沿いにあるルーブル美術館と広場。県庁舎が松川沿いにあるので、立地条件は不思議と同じである。

さて、今回の「アイデアコンペ」に参加するにあたり、提案対象エリアのすべての施設を改めて見聞した。そして、これらの施設を利用するための人たちの車が、その駐車場にビッシリと並んでいるのを見て、パリのセーヌ川沿いにあるルーブル美術館を思い出した。建物の中庭の前には、見事な噴水が上がり、緑の芝草を敷き詰めた公園と広場になっていて、駐車場がないため一台の車も目にすることがなく、不思議な安らぎを感じたのだ。現代人のほとんどが、できれば車を見ないのんびりした生活を望んでいるのではないだろうか。

また、中庭に噴水が上がるシャイヨー宮の前に立つと、デザインこそ違うが、まるで噴水越しに富山県庁を見ているような感動を覚え、帰国してから当時の市長に報告したときのことである。

「富山は昭和20年8月の富山大空襲で、市の中心部の99.7%以上が消失する大被害を受けましたが、戦災の復興事業にあたり、『世界で最も美しい街・パリ市』を参考に区画事業を行ったのです。そして、富山駅をなんと凱旋門に例え、そこから松川・富山城址に向かって伸びるシンボルロードを、なんとあの有名なシャンゼリゼ通りをモデルに設計したんですよ。それが今日の城址大通りとなったのです」との市長の言葉に私は驚いた。ルーブル美術館に向かって伸びるシャンゼリゼ通りと、両側の歩道のマロニエとプラタナスの代わりに、ケヤキ並木に縁取られた城址大通りは〝水の都とやま〟にふさわしい「日本一美しい目抜き通り」と言える。

そう言えば、神通川を埋め立てて中心部が誕生した富山と同じように、パリの中心部も16世紀まで沼地で、17世紀になって整備され、今日のセーヌ川が残されたという。「世界一華麗な目抜き通り」と言われるシャンゼリゼ通りを参考に、富山のシンボル通り「城址大通り」をつくった先人たちの先見性には脱帽である。

こうして県庁周辺エリアの歴史と現状を調べてくると、その課題とありたい姿が見えてくる。

◀県庁舎のすぐそばの松川では、多くの人々が遊覧船で花見を楽しむ。

車道を廃止し、格調ある広場を

富山県庁舎は国の登録有形文化財にも登録されており、県都・富山市にあっても貴重な歴史遺産である。この建物は富山県民の誇りとなっており、これからも大切に保存されるべきだろう。そして、周りの敷地にある駐車場を移転し、ルーブル美術館やシャイヨー宮の周りの広場のように格調のある空間にすることが大切であろう。また、正面の一方通行の車道を廃止して、県庁前公園と旧NHK富山放送局も一体化すれば、さらに価値が高まるだろう。同時に県民会館の周りの駐車場も廃止できればなおよい。

次にサブエリアの松川及び沿道だが、現在一方通行となっているこの車道を廃止して、「松川べり彫刻公園」と一体化してはどうだろうか。本年正月に発生した能登半島地震により、この道路は8月頃までの8ヶ月間通行止めになっていたが、ここをどうしても通らなければならない車がなかったため、誰からも不満が上がらず、むしろ車の姿も騒音も聞こえない空間は、まるで山奥に入り込んだような静寂が漂っていたように思う。

松川は春の桜並木の美しさはもちろん、新緑、秋の紅葉、冬の雪景色と1年中私たちの心を癒やしてくれるのだ。

こうして駐車場や車道がなくなった県庁周辺のエリアは、富山県庁舎を中心に公園と多目的広場で囲まれることとなり、風格のある県都の象徴となるだろう。

◀コンベンションのバンケット会場としても利用されている松川べりのカフェテラス

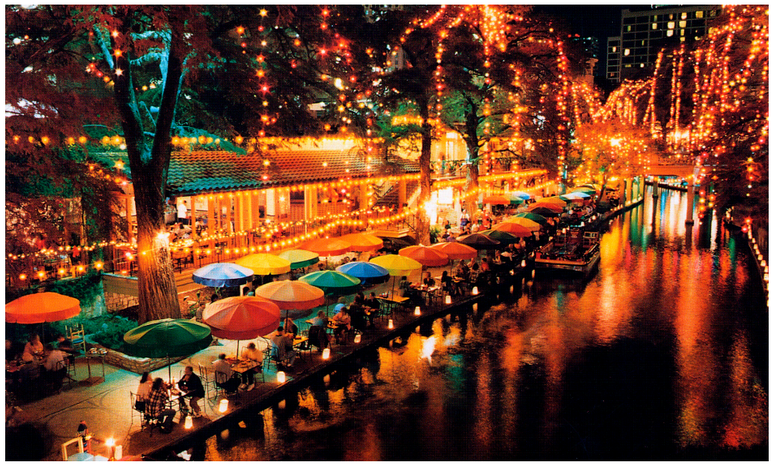
さらに先のパリが、この公園や広場をどのように活かして使っているか見てみよう。ご存知のように、今年開催されたパリ・オリンピックはセーヌ川をメイン会場に、船上パレードに始まり、エッフェル塔やシャイヨー宮、ルーブル宮殿などの公園や広場を使って、まさにセーヌ川を中心に行われた。

ウォーカブルな空間を活かす

わが富山県庁舎はまさに富山県民のシンボルである。この広場を使って、県下市町村の年間行われているお祭りやイベントを前夜祭として、休日に開催したらどうだろう。八尾の「おわら」、城端の「むぎや」、魚津の「たてもん」など、これらのイベントが県庁舎の周りの多目的広場でも開催できたら、地元住民を勇気づける計り知れない効果があると思われる。

◀ベネチア・サンマルコ広場では音楽会が開かれる

今年、松川河畔で開催された「リバーフェスタとやま」は出演するアーティストはもちろん、



◀多くの人々で賑わうサンアントニオの川辺り

集まった聴衆からも大変喜ばれた。「県庁周辺エリア」はベネチアのサンマルコ広場のように、街の中心にあるため、大変魅力的なエリアで、富山駅から総曲輪、西町といったまちなか商店街を楽しく歩いていけるウォーカブルな空間に、来街者は改めて驚くのだ。

▶今年も松川河畔で行われた「リバーフェスタとやま」と松川べりの舞台で行われていた「まつリバーライブ」

かつて富山県民から総曲輪が〝富山の銀座〟と呼ばれ、〝銀ブラ〟ならぬ〝総ブラ〟として楽しまれていたが、「県庁周辺エリア」のあちこちでいろんなイベントを開催することで、来街者が富山駅からまちなかの商店街地区までを憩いと愉しみのあふれる空間として生まれ変わらせることができる。

「県庁周辺エリア」に足りないのはハード面ではなく、ソフト面である。アーティストたちを始め、様々な人々が楽しいイベントを開催すれば、憩いと楽しみを求めて自然と人が集まり、来街者や従業者、居住者のウェルビーングを向上させるエリアになるのだ。

◀富山県庁横の富山城址公園と松川が一体化した親水空間「親水のにわ」

〝リバーシティ〟の誕生で日本一のまちを目指そう

最後に「県庁周辺エリアの未来の姿」を暗示する素晴らしい物語として、アメリカ・テキサス州にサンアントニオという、川の中にまちを作った素晴らしい都市を紹介して、私の提案を終わらせていただきたく思う。

このまちは、実は全米ナンバーワンの人気都市として知られているが1985年になんとこのサンアントニオ市から姉妹都市の申込みがあった。サンアントニオ市では姉妹都市の提携先として、自分たちのまちと同じように川がまちの中心を湾曲して流れる都市を探しており、「松川」が流れる富山市を発見したのだという。そこで、通訳を伴った国際局長が富山市を訪問したが、あいにく当時の市長が病気で入院中であり、この姉妹都市提携は実現しなかったという経緯がある。

◀サンアントニオのリバー劇場。土手を切り込んで夢の舞台が造られた。

当時、「川の王国」を目指していた中沖知事は、富山県のリバーフロントを考える上で、サンアントニオ市に学ぶことが多いと、自らサンアントニオ市を視察され、「街の中心部にはリバーウォークが作られ、川べりにはレストラン、ホテル、コンベンションセンターが集まり、川の劇場や美しい庭園など、観光客をより楽しませるための工夫が凝らされ、清掃や樹木の手入れ、水質の保全などの管理も行き届き、心地よい環境が保たれていた。富山県のリバーフロントを考えるうえで、サンアントニオに学ぶことが多い」と、県議市議や行政マンの視察も奨励された。

2003年9月、神通川馳越線工事完成100周年を記念し、「リバーフェスタとやま2003『川と街づくり国際フォーラム』」が国土交通省、富山河川国道事務所、富山県、富山市、富山商工会議所、富山青年会議所などの後援で富山国際会議場、松川周辺で開催された。

◀「リバーフェスタとやま2003」では、松川で華やかな水上パレードも行われた。

こうしたまちの活性化に向けたまちづくりの活動が、地域の魅力や可能性を引き出していくのではないだろうか。〝川の街〟が誕生すれば、楽しく歩けるウォーカブルな、そして憩いと愉しみあふれる空間として生まれ変わらせることができ、その波紋は県庁周辺エリアにとどまらず、県下中に広がっていくように思う。

神通川によって生まれ、その名残を残す松川とともに育ってきた富山。そのユニークな歴史を残す「県庁周辺エリア」の「ありたい姿」が見えてきた。川から誕生したユニークな都市を参考に世界一素晴らしい〝まち〟を、県庁周辺エリアに誕生させることができるかどうかは、私たち県民の決意と情熱にかかっている。